# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 66

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

# 目次

1301. 淡々とした日の夜の夢より

1302. 人間証明とあの日とこの日

1303. 内と外をつなぐ書斎の窓

1304. 一匹の羽アリとこの瞬間の現在の中で

1305. 夢の中でのモーツァルトの話から:円と鏡像関係

1306. 来年の米国での居住先と他力について夢

1307. 不死の情念

1308. 北欧旅行への思い

1309. 生命のぬくもり

1310.「かくあらねばならぬか？」「かくあらねばならぬ」

1311. 小雨降る日曜日の午後

1312. 自分の中の夏

1313. 一羽のカモメの教え:表現行為の動因から形へ

1314. MOOCに関する二年目の研究案

1315. この時の流れのように

1316. 最後の砦の前で

1317. 冬の終わり

1318. 風土と自己

1319. この夏の北欧旅行の旅程:デンマークとノルウェーへの旅へ向けて

1320. ここでしか育まれえぬ思考と感覚

© YOHEI KATO 2018

## 1301. 淡々とした日の夜の夢より

やはり昨日は少しばかり不思議な日であった。淡々と時間が過ぎ去り、自らが時間の淡々さになったかのように思えるような一日だった。そして、一日を振り返ろうとして書き留めた昨夜の最後の日記も、実に淡々としたものだった。とても無機質な文章であり、後から読み返した時に、そこに有意味なものを見出すことが難しいかのような文章だった。

しかし、そうであったとしても、あの文章を書き留めていた自分には、内側にある何かを外側に形として残しておこうとするような衝動があったのは確かである。その衝動はとても小さなものだったかもしれないが。

一夜が明け、今朝は朝日の光によって目覚めた。寝室の窓から差し込む穏やかな黄色の光の束が、部屋全体を優しく包んでいた。今日は雨の予報だったのだが、その予報が嘘であるかのように、晴れ渡った空が視界に飛び込んできた。昨日は淡々とした一日の中で、少しばかり自分のエネルギーを消費していたのか、昨夜はいつもより睡眠のサイクルが一回ほど多く、六時半を過ぎた頃に起きた。

寝室から書斎に向けて歩いている最中、昨夜の夢の印象が再び自分の中で湧き上がっていた。昨日は夢の中で、おそらく東京であろう都市にある一つのヨガ教室にいた。その教室は、お洒落な建物の中にあり、比較的繁盛している様子を醸し出していた。その教室で、私は知り合いのヨガインストラクターと偶然出会い、彼女から一つの身体動作を教えてもらった。

それは正統的なヨガの身体動作ではなく、つま先立ちになって、リズム感よくその場で素早くぴょこぴょこと飛び跳ねるような動きだった。それはどこかバレリーナの足さばきにも似ており、私はその動作をうまく行うことに苦戦していた。左右の足のつま先を交互に地面につけなければならないのだが、それが時々同時に地面についてしまうのだ。そうした瞬間に立ち会うたびに、自分のリズム感の悪さを痛感させられた。

だが、その知り合いのインストラクターから手取り足取りその動作のコツを教えてもらったことによって、私の動作は随分と向上した。動作の向上を確認したところで、私は彼女にお礼を述べ、その日に参加する予定のクラスが行われる部屋に移動した。その部屋には、ヨガには似つかわしくなく、学

校の教室を彷彿とさせるように、机と椅子がいくつか並べてあった。五、六人ほどの生徒がすでに部屋の中におり、彼らは全員机についていた。

私は教室の右端の一番前の机に着席した。しばらくすると、担当のインストラクターが部屋に入ってきた。その女性のインストラクターの年は私と同じぐらいであったが、面識はなかった。彼女が教室の一番前に置かれたインストラクター用の机についた瞬間、このクラスが占星術に関するものだということがわかった。

この気づきを得た瞬間、私は驚いたのだが、しかしそもそも私はこのクラスの内容を知って今ここにいることを思い出した。クラスが始まると、そのインストラクターは、自分がなぜ少々遅刻したのかの理由を説明し始めた。彼女曰く、クラス開始10分前に起床したからだそうだ。そして、その時刻に起床するのは毎日のことであり、その時間に起きざるをえないのは、第二次世界大戦の影響によるものだと述べた。

それを聞いた時、私は彼女の論理がよく理解できなかった。するとそのインストラクターは、10分前に起床したのは嘘だと述べ始めた。その話を聞いている生徒たちも少しばかり困惑したような表情を浮かべており、それに追い打ちをかけるように、そのインストラクターは、自分が毎回遅刻するにもかかわらず、なぜこのヨガ教室で働き続けることができるのかの理由を私たちに尋ねてきた。

私は教室を振り返ると、知り合いの男性がそこにいることに気づき、彼は「クリエイティビティ」という言葉を用いながら、その理由を述べ始めた。だが、彼の言っていることもいまいちよく理解できなかった。そのインストラクターは、本当に私たち一人一人にその理由を述べさせるつもりであり、次に、私の後ろに座っている中年女性に発言を促した。その女性の回答は、一言二言で終わるような内容であり、すぐに私の番が回ってきた。

私は立ち上がり、教室の真ん前に移動し、三つの理由を述べ始めた。回答を述べる前に、私はそのインストラクターの嘘さえも嘘である可能性をまだ疑っているという旨の発言をし、これから紹介する回答は「仮説的理由」であると一言断っておいた。一つの理由に対して、複数の仮説がぶら下がっており、その仮説の正しさと誤りを示すような証拠を複数提示し、自らの思考プロセスの中で排除さ

れていった複数の仮説すらも示しながら、最終的には一つ目の仮説的理由の妥当性が高いことを述べ始めた。

その説明の最中、随分とそのインストラクターを侮辱するような仮説や証拠などもあったが、私はそうしたことを気に留めながらも、あえてまくしたてるように複数の仮説と証拠をどんどんと挙げていった。説明を全て終えると、それを聞いていた他の生徒もインストラクターも、全員が黙っていた。

その時、私はこの状況を作り出すことが自分の目的だったのだということを知った。そこで夢から覚めた。書斎の窓越しに、晴れ渡る早朝の景色を眺めながら、私は真の有能さと真の無能さについて少しばかり考えようとしていた。2017/7/14

## 1302. 人間証明とあの日とこの日

今日はまだ書物にも論文にも触れていない。何かを書き残しているような感覚が内側を走っているからだ。絶えず書くことによって、自らを規律付けていくような生活。書くことによって、自分自身をこの世界の中に刻み、そこから新たな自分を刻みだしていこうとするような生活。すなわち、刻印からの刻成を絶えず行うような生活。自分の場合、それは書くことによってしか実現され得ないものである。

書くことによって、新たな自己が刻成される時、初めて自分が絶えず生成を続けるこの世界の中に刻印されていくことを知る。そして、自分自身がこの世界の生成の波に関与しているのだということがはっきり理解されるのだ。しかし、それは書くことによってしか実感され得ないものであり、書くことによってしか見えてこない現象だ。書くことを通じた自己刻印と自己刻成を行い、それによってこの世界になんとか関与しようとするのが今の自分の偽らざる姿である。

先ほど、ソファに腰掛け、朝食のりんごを食べながら、こうした自分の姿についてぼんやりと考えていた。このような生き方をせざるえを得ない自分について考えていたのだ。もはやそうしなければ生きることができないという衝動的かつ無意識的な行動を生むのは、今の私が組み込まれている発達段階の作用だろう。自らの内面の成熟段階について冷静になって考えてみると、そのような生き方を超えた生き方というものがあることに否が応でも気づかされる。

だが、それがどのような生き方なのかわからないということ。そして、そうした生き方の特徴は、発達理論の説明の中にすでに記述されているが、その特徴が自らの生の中でどのように発現され、それを自らがどのように感じ取っていくのかは未知である。

次の段階の特徴を眺めることはいくらでも可能なのだが、その段階を自己の内側から生きるというのは全く次元の異なる話である。間違いなく今の私は、現在の自分の内面の成熟段階がいかほどであり、日々の行動を生む行動論理がどのような性質を持っているのかを把握している。

それに加え、次の段階の特性すらも見据えることができているのだが、新たな段階を通じて生きることはまだほど遠いように思える。今の地点がわかり、次の地点の輪郭がもはや見えているのに、その地点にたどり着けないもどかしさ。これは人間発達のさがである。

私は文章を絶えず書きながら、このような生き方があるのだということを自ら証明しようとしているのかもしれない。人間証明。私が毎日文章を書き留めているのは、一人の人間が、真に人間になろうとする道を検証するためであり、人間が人間らしく生きることは何なのかを追究し、人間らしさの証明を自ら行おうとしているのではないかと思うのだ。それが、書くことによる人間証明と呼ばれるものだ。私は、毎日文章を書くことによってしか、その一日がそこにあったのだということを証明できなくなっている。

「あの日の自分がなければ今日という日の自分はなかった」という言葉は、自己存在の核心を突くものではないだろうか。私は、「あの日が確かにあったのだということ」を未来の自分に伝え、未来の自分は今この瞬間の自分と一寸離れずつながっているのだということを証明したいのだ。それを伝えるためには、それを証明するためには、書くしかないのである。あの日の自分とこの日の自分が絶えずつながっているのだということ。私はそれを証明するために、文章を書き続け、今日という一日を心底大切に生きたいのだ。2017/7/14

## 1303. 内と外をつなぐ書斎の窓

昼食前に、少しばかり文章を書き留めておきたいと思った。当初の天気予報とは異なり、まだ雨が降らず、空には雨雲させ見えない。

先ほど、この開放的な窓から見える景色を眺めながら、これから世界のどこで生活をすることになったとしても、開放的な窓を持つ書斎のある家に住もうとつくづく思った。それは単に仕事を進めるためだけではなく、自己が安らぎ、自分がこの世界に真に存在していることを自覚しながら毎日の生活を送るために必要なのだ。そして、書斎の机は必ず、開放的な窓に面して配置することも大事である。

常に世界を見ながら自己について考え、常に自己を見ながら世界について考えることがどれほど重要なことなのかを知る。書斎の机越しに見える開放的な窓は、自分にとって間違いなく内と外をつなぐ重要な存在である。

午前中は、複雑性科学と発達科学を架橋させる試みに従事している幾人かの研究者の論文が編集された専門書を読んでいた。それを読み進める中で、自分の日々の探究は科学を基軸に置きながらも、哲学的な探究もそこに取り入れなければ、均衡が失われると感じていた。さらに言えば、科学的探究と哲学的探究だけでは、自己の存在を通じてこの世界で真に生きていくことは難しいと思った。そこで必要になるのは、やはり霊学的探究であった。

確かに私は、科学や哲学に関する専門書や論文を読む日々が続くと、時折、無性に霊学に関する専門書や論文を読みたくなる。それはまるで、魂の渇きを癒すかのような欲求であり、衝動である。そうしたことに思いを巡らせてみると、やはり科学だけに偏った探究や哲学だけに偏った探究には、満たされぬ何かがあり、それは科学と哲学の双方の探究を同時に進めていたとしても同じである。

科学・哲学・霊学には、そこで開示されるものがそれぞれ異なることは言うまでもなく、そこで開示されるものが自分自身に与えるものも全く異なる性質を持っていることがわかる。科学的探究を通じて、自己と世界を外側から眺め、哲学的探究を通じて、自己と世界を内側から眺める。霊学的探究は、眺める自己や世界それすらも超えた存在を眺めようとする道を切り開いていく。そのようなことを思う。

いずれにせよ、外側から眺めていては決してわからない内側の世界があり、内側から眺めていては決してわからない外側の世界があることは確かだろう。そして、眺めているだけではわからない世界

© YOHEI KATO 2018

というものがあることもまた確かだろう。内側の世界と外側の世界をつなぐ書斎の窓は、そのようなことを私に語りかけているようだった。2017/7/14

## 1304. 一匹の羽アリとこの瞬間の現在の中で

天気予報通り、午後から雨が降り始めた。強い雨滴が窓ガラスを打ち、自転車を漕いでいでいる人たちが、急いでそれぞれの目的地に向かっている様子が見えた。激しい雨が去り、夕方から再び晴れ間が広がった。夕食の一時間半前にナッツ類を摂取しようと思い、食卓の椅子に腰掛けた。すると、食卓の窓ガラスに一匹の羽アリが付いているのが見えた。

さて、この羽アリは内側の窓ガラスに付いているのだろうか、それとも外側の窓ガラスに付いているのだろうか、という素朴な問いを自らに投げかけた。いつも私は部屋に虫がいるのを確認すると、できるだけ殺生することなく、部屋の外に逃がすことにしている。もし仮に、目の前の一匹の羽アリが部屋の内側にいるのであれば、それを外に逃がす手間がかかるため、期待としては外側の窓ガラスに付着していてほしいという思いがあった。すると突然、その羽アリは私の思いを汲み取ったのか、どこかに飛び立っていった。

先ほどの問いに対する答えは、「外側の窓ガラス」だった。そう思った瞬間、その回答が少しばかりおかしなことに気づいた。食卓から見ればそれは外側だが、外側の世界にいる人から見ればそれは内側だと思ったのだ。つまり、どの視点を取るかによって、内と外は変化しうるということに気づいたのである。

内の論理は外側から絶えず検証されなければ盲点を拡大させ、外の論理は絶えず内側から検証されなければ本質が見えてこない。また、自己の発達段階に関しても、それを内側と外側から捉えるということをしなければ発達など起こりようがない。そのようなことをあの羽アリは私に教えてくれた。

夕食後、再び小雨が降り始めた。自己の固有性を見出すことが、自己に回帰する点について思いを馳せていると、発達に伴う時間の矢について少しばかり考え直さなければならないと思った。ダイナミックシステム理論の観点からすると、過去のある時点における振る舞いが、時間軸上の次の時点における振る舞いを決定するため、自己の固有性を見出すことは、自己を前に進めていくことを

表すだろう。しかし、そのように考えると、自己が自己に回帰するという運動が掴みにくくなってしまう。それを考慮すると、時間の矢を逆向きにさせ、未来の自己が現在の自己を規定しているという考え方を採用する必要があるように思った。

つまり、時間因果を逆にさせ、現在の自己が立ち現れているのは、未来の自己からの働きかけによるという発想である。過去の自己が現在の自己を決定づけるという時間の矢と、未来の自己が現在の自己を決定づけるという時間の矢を同時に放つと、両者が現在でぶつかり合い、時間が静止するような感覚があった。いや、時間が消失し、消失した時間の中に現在の自己がいるという感覚があった。この感覚を得たとき、自己はやはり時間を超越した存在なのかもしれないと思わされた。

再び雨が止んだ。時間が止んだのと同じぐらい、雨は静かに止んだ。だが、自己は止むこともなく、激しく動き続けていることを知った。過去から未来でもなく、未来から過去でもなく、この瞬間の現在の中で。2017/7/14

## 1305. 夢の中でのモーツァルトの話から：円と鏡像関係

薄い雲に覆われた空。風が呼吸をしているかのように断続的に吹く。外側の世界は今日もとても静かである。今朝はベッドから起き上がるか否かの時に、昨夜見た夢の鮮明な印象に包まれていた。

私は夢の中で、モーツァルトと会話をしていた。彼の話を四六時中聞いていただけだったので、それを会話と呼べるかどうかは疑わしい。いずれにせよ、モーツァルトと出会い、そこで彼の話を直接聞く機会を得ていたことは確かだ。一体何の話を聞いていたのかというと、それは絵画に関するものだった。

正直なところ、音楽の話を聞くのではなく、絵画の創作方法について話を聞くことになろうとは、全く予期していないことだった。絵画の創作に関して、モーツァルトが説明していたのは「円」と「鏡像関係」に関するものだった。私は、実際にモーツァルトが描いた絵を見せてもらう機会を得た。その絵は、広大な草原の中にたたずむ一本の木を描いていた。

その木には、春の太陽光が当たっており、黄色く輝いていた。モーツァルトの話によると、その木は自分の目に見えた向きとは逆に描いているということだった。「実際に視覚に映る景色と真理を見通

す眼に映る景色は「鏡像関係」になっている」ということをモーツァルトは私に説明し始めた。興味深くモーツァルトの話に耳を傾けていると、その絵画に描かれた木の先端部分が、太陽の方向に向かって空の中に溶け出していることに気づいた。それにも何らかの意図があるのだろうが、私はそれについて聞くことをしなかった。

モーツァルトがさらにしばらく話を続けていると、絵画の創作についてモーツァルト以上に造詣が深い人物がその場に現れた。その時、モーツァルトがその人物について紹介をし始め、その人物はモーツァルトよりも16歳ほど年上であり、鏡像関係を活用した彼の作品をぜひ参考にしてほしい、ということを私に述べた。35歳でこの世を去ったはずのモーツァルトは、その時46歳だった。

鏡像関係についての話を終えると、モーツァルトは私の心の内を読んでくれたのか、木の先端が太陽の方向に向かって空に溶け出している箇所を指差しながら、それについて話を始めた。しかしその説明は、なぜ木が空に向かって溶け出しているのかではなく、太陽に関するものだった。なにやら、事物を円として捉えると、その特性を正確に捉えることができるとのことであった。円は事物を定量的に分析することを可能とするのみならず、定性的な分析をも可能とする、ということをモーツァルトは熱心に語っていた。

この点についても、突然現れたその権威的な人物の方が詳しいらしく、モーツァルトは自分の説明の間中、その人物の顔色を伺いながら話を続けていた。だが、そこには権威に対して卑屈になるという姿はなく、自分の創作物に対してモーツァルトは強い自信を持っているようであった。また、創作技術に関して、自分よりも優れた人がいれば積極的に意見を求めるという誠実な態度がそこにあった。結局、私はこちらからモーツァルトに何かを述べることは一度もなく、そこで夢から覚めた。

起床後、早朝の景色を眺めながら、円と鏡像関係についてぼんやりと考えていた。自己の世界とそれを取り巻く世界は円を描くように相互に影響を与え合っており、それが様々な「縁」が生まれる世界を作り出す。そして、無数の縁が生まれる世界よりもさらに高次元の世界が存在し、その高次元の世界と鏡像的な関係を通して立ち現れているのが、私たちが生きる縁で満ち溢れた世界なのだ、という考えが、大海に一滴の水が落ちるかのように静かにぽつんと現れた。2017/7/15

© YOHEI KATO 2018

## 1306. 来年の米国での居住先と他力について

来年の今頃は、再渡米に向けての準備をしているかもしれない。そのようなことを思う。私はもともと、フローニンゲン大学にやって来る前から、オランダでの生活は二年間になるだろうと予想していた。しかしその後、さらにもう一年オランダに留まりたいという思いが湧き上がっていた。そうした思いが生じたのは、今から半年ほど前のことだったように思う。だが、ここ数週間の日記で書き留めていたように、今の私は、やはり来年は生活拠点を再度米国に移そうと思っている。

すでに所属先の大学の候補は絞られており、生活する街の目星がついている。昨夜、とっさの思いつきで、来年に住むことになるだろう家の候補を検索していた。これは大変気の早いことなのだが、検索をしてみることによって、いくつか家の候補が見つかり、すでにその街での生活をイメージすることができる状態になった。実際にどれだけキャンパスに足を運んで研究することになるのかによって、大学の近くに住むのか、少しばかり郊外に住むのかを決めたいと思う。まだその大学から受け入れられたわけではないのだが、すでにそのような計画を進めている自分がそこにいた。

昨日に引き続き、今日も分厚い雲が空を覆っている。ただし、天気予報によれば、今日は雨が降ることはないそうだ。午前中は仕事に関するオンラインミーティングを行っていたため、午後から自分の探究に取り掛かることにしたい。昨日ふと、他力による創作の重要性に気づかされることがあった。

一人の人間の創作物が真に普遍性を獲得するというのは、表現しようとするものが、自発的に生まれる大きな場による他力の働きによって形となる現象のことを言うのではないか。自己が生み出す表現物が、自己を超えて、普遍性に至るためには、この他力の働きが重要になるのではないか、という気づきを得ていた。

自己それすらも他力による構築物であることを考えると、この考え方はとても大切なもののように思える。日々の歩みそれすらも、自力ではなく、他力の恩寵を受けながら実現されているということを噛みしめながら、午後からの仕事に取り組みたい。2017/7/15

## 1307. 不死の情念

情報は死ぬが情念は死なない。そんなことを思わされる瞬間があった。日々、私が日記を書き留めているのは、情報を残すためではない。自らの情念をそこに残すためなのだということを知る。この情報化社会の中で、現代人は情報を求めようとする。それも際限なく、飽くなきほどに求めようとする。

私は、情報の有用性や価値を認めながらも、過剰な情報を追いかけようとする現代社会の状況に待ったをかけたいと思う。日々の日記を改めて読み返すと、時に自分の文章が生き生きしていないことがある。その理由を考えてみた時、一つ明確になったのは、そうした時は大抵情報を書き留めているのだ。情報だけに彩られた文章はどこか空疎で味気ない。

現代人は、大量の情報を盲目的に消費する状況に置かれており、情報への渇望が満たされていないのかもしれない。だが、本質的には、それは情報への渇望が満たされていないのではなく、人間としての存在が立ち込める情念が満たされていないのではないか、という思いに行き当たった。情念が満たされていないというよりも、情念への触れ合いを喪失していると言ってもいいかもしれない。とにかく、どこか私たちは、血の通っていない空疎な情報に浸りきることに慣れきってしまっている。これは現代社会の憂う事態の一つだと思うのだ。

欧州での日々が一日、また一日と過ぎていくとき、それらの日々を、過ぎ去っていくものにするのではなく、積み重なっていくものに変容させようとなんとか試みる自分がいる。ここでの毎日は、決して過ぎ去らせてはならないものなのだ、と言い聞かせる自分がいるのだ。究極的には、それは積み重なっていくものを超え、死を超えた永遠性を獲得するべきものにしていく必要があると強く思っている。その実現に向けた試みとして、私は日々の出来事を、単に情報の記録として日記に綴ってはならない。

そうではなく、情念の宿ったものとして綴っていく必要があるのだ。私は欧州での生活にあたり、何人かの日本人が今から60年ほど前に書き残した日記を持参した。その日記に私の心が動かされることがあるのは、そこには単なる情報が記載されているのではなく、感情を動かす感動としての情念がそこに宿っているからなのだ。私の心は、死活した情報にもはや動かされることはない。

© YOHEI KATO 2018

私の心を動かすのは、永遠性を獲得した人間の情念なのだ。一人の人間として生きるということは、生きることの中に自らの情念を刻印することでしかない。そのために日記を書き、そのためだけに日記を書く。2017/7/15

## 1308. 北欧旅行への思い

読みに読み、書きに書きという生活を送る中、私は今の自分が認識している「読みに読み、書きに書き」という言葉を幾十にも累乗に掛け合わせたい気持ちで一杯である。今の私が「狂気」だと見なしていることが、日々の「朝食」と同じであるかのように捉えたい。いや、今朝目覚めたのと同じように、それが早朝の目覚めと変わらぬものであって欲しいと願う自分がいる。

今から八年後に自らの仕事がようやく始められるようになるまで、私は修練に修練を重ね、準備に準備を重ねたいと思う。八年というのは長いようでいて、非常に短い。一日が一つの準備であるならば、3000回ほどの準備の後にその日は否が応でもやってくる。その一つ一つの準備を、規律と克己の中で着実に推し進めていく。

聞く必要のない声の一切を退け、ごく少数の聞くべき声だけに耳を傾ける。今から八年後の来るべき日に向けて、夕方からのなすべきことに取り組みたいと思う。

来週の月曜日か火曜日に、そろそろ北欧旅行の諸々の予約をしておこうと思う。八月の初旬に、私はフローニンゲンから陸路でドイツを経由し、デンマークに行き、そこからノルウェーに行く。主な滞在先は、コペンハーゲンとオスロ、そしてノルウェー北西の街ベルゲンだ。旅の大枠はすでに自分の頭の中にあり、それは以前の日記にも書き留めてある。

その日記を参考に、詳細を詰めていくことをしたい。八月からの北欧旅行について思いを馳せていると、自然と昨年夏の欧州小旅行の記憶が想起された。あの時の旅の印象は、一年経った今でも色褪せることを知らない。あの旅がとりわけ列車の旅だったからだろうか、各国、各都市を移動している時に自分の目で見た風景や、その時の自分の感情が強く自分の内側に刻み込まれている。

今回の北欧旅行も往路に関しては、バスと列車を乗り継いで目的地に行こうと思っている。夏の北欧世界に思いを馳せていると、なんとも言えない清朗感に包まれてくるから不思議なものである。

ドイツからデンマークへ、デンマークからノルウェーへ、そしてオスロからベルゲンへと至る移動の最中、私は何を見て、何を感じるのだろうか。北欧の自然に真に触れる時、私はもしかすると浄福感のようなものを得るのではないかと今から思ってしまう。

いつからか、観光のためにどこか異国の地に旅行することを私は一切やめ、意思を超えた必然性に導かれる形である場所に行くことしかできなくなった。今回の旅もまさにそうだ。光を観るためにある場所に行くことほど馬鹿げたことはないように思える。今回の旅は、光を観るためにあるのではなく、自己を観るためにあり、自己を見ている自己を観るためにある。デンマークの光もノルウェーの光も、それが自己の光となり、自己を照らすものになることを今から楽しみにしている。2017/7/15

## 1309. 生命のぬくもり

早朝の三時半、半覚醒状態の意識の中で、私は何かの気づきを得たようだった。それはダイナミックシステム理論を活用した人間の発達に関するものであり、「階層的統合化(hierarchical integration)」という概念に関するものだった。非常に大きな気づきであり、ノートにこれを書き留めていたとばかり思っていたのだが、またしても半覚醒状態の意識がもたらす錯覚であった。

階層的統合化という概念の本質を突くような具体例か比喩が思いついたようだったのだが、今となってはそれを思い出すことはできない。その具体例か比喩の形はもはや見えないのだが、その目には見えないものが自分の内側に留まり続けているという感覚だけがある。

今朝は六時過ぎに起床し、六時半から本日の仕事を開始した。昨日は土曜日であったから、今日は日曜日だ。今日は書斎の机に置かれた論文を順番に読み進めていく。読む分野も数も決めることなく、積み重ねられた論文を上から順番にただ読んでいく。そのような日になるだろう。

少し前かがみになって机の上に置かれた論文を取ろうとすると、書斎の窓から一本の街灯が見えた。この家に住み始めてから一年が経とうというように、こんなところに街灯があることに初めて気付いた。その街灯のてっぺんは平坦になっており、一羽のハトがそこで休んでいた。どうやらこのハトは一人らしい。

今この瞬間は少しばかり風が強いが、そのハトは微動だにせず街灯のてっぺんに留まっている。そして、ただ前方だけを見つめ、何かがやってくるのを待っているかのようだ。すると、ハトは立ち上がり、身繕いをする動作を始めた。それが終わると、立ち上がったまま、再び前方だけを見つめていた。そのハトの前方を、二羽のハトが飛び去っていった。

それでもこのハトは街灯のてっぺんから動くことをせず、何かを待っている。もしかすると、このハトは何かを待っているのではなく、自己の孤独さを守ろうとしているのではないかと思った。その姿はとても気高く見えた。

昨夜は就寝中、階層的統合化に関する気づきのみならず、二、三の印象的な夢を見ていた。中でも特に印象に残っているのは、トイプードルの愛犬が現れた場面であった。私はあまり馴染みのない部屋の中にいて、そこに敷かれている布団の上で寝ようとしていた。布団の上に横向きになって寝ようとしていると、愛犬が部屋の中に入ってきて、寝ている私に近づいてきた。

愛犬のトイプードルは、これから寝ようとしている私の顔を舐め回し始めた。しかし、それはかまってほしいというサインではなく、眠たいサインであった。実際に、愛犬もちょうど私の枕の外側に横たわり、これから寝ようとし始めた。これは眠りの意識に落ちる前の出来事であったため、愛犬が自分の枕元にいることを私もわかっており、左手を愛犬の体の上に置きながら眠ることにした。

夢の中の私が、さらにもう一段深い夢の世界に入る寸前で、愛犬の心臓の鼓動をありありと感じた。この脈打つ心臓の動きに触れた時、生命のぬくもりのようなものを感じた。左手に温かさを感じ、その温かさが全身を包んだ。その瞬間、生命のぬくもりを感じることは、これほどまでに強烈な幸福さをもたらすのだということを知った。

その夢のさらに奥にある夢の世界に入ることなく、消えることのない幸福感を抱えたまま、私は夢から覚めた。その幸福感は、夢から覚めた現実世界においてもなお自分の内側に残っていた。その連続的な感覚に気づくとき、今この瞬間の世界と先ほどの夢の世界は連続したものなのだと知る。夢から覚めた後に広がるこの夢の世界で、今日これから自分がなすべきことに取り組んでいきたい。
2017/7/16

## 1310.「かくあらねばならぬか？」「かくあらねばならぬ」

夏季休暇に入ってからもう少しで一ヶ月が経とうとしている。この一ヶ月を振り返ってみると、その歩みは順調だ。どのような意味で順調かというと、自分のなすべきことが遅々として進んでいないが着実だという意味である。時が流れるのを早く感じることも遅く感じることもないように、時の流れにピタリと身を寄せることによって全てが進行しているかのようだ。

止まった時の流れの中で日々の仕事に取り組めているということ。これが順調さの証である。七月も第三週に入ろうというのに、まだ気温が低い。特に朝と夜は、自宅の中で半袖になっていることはできない。早朝の仕事を支えてくれるものとして、朝に入れる温かいコーヒーの存在がある。今も足元に寒さを感じながらも、コーヒーの香ばしい香りが立ち込める書斎の中で仕事に取り組んでいると、静かな充実感を覚える。

先ほど、過去のある日記を読み返していた。そこにはカントの定言命法に関する話題が書き留められていた。先日、カントが当時の時代と向き合い、時代の精神の負の側面と闘いながら自らの思想体系を構築していったことに改めて感銘を受ける瞬間があった。その時の自分のメモ書きをみると、現代社会が突きつけている課題と対峙し、現代の精神が持つ負の側面と真っ向から対決する中で、自らの体系を構築していこうという気持ちが改めて湧き上がっていたようだった。

また、その時のメモを見ると、発達現象を複雑性科学の観点から探究することを継続させていきながらも、それが外側からの客観的な現象把握に留まらないようにすることが大事である、ということも書き留められていた。つまり、その時の私は、発達現象を複雑性科学を含めた、外側からの客観的な方法を用いて探究をしていくだけではなく、自らの内側から発達現象を捉えていくという、主観的方法を用いても探究を行っていく必要がある、ということを強く自覚していたのだった。それはおそらく数日前の日記で書き留めていた、科学・哲学・霊学の話につながる。

これらはすべて、カントの定言命法に関する以前の日記から思い出されたことである。そこからさらに付随して、私は、ベートーヴェンが死の数ヶ月前に完成させた弦楽四重奏曲第16番を思い出した。この作品の第四楽章に、「かくあらねばならぬか？」というグラーヴェと「かくあらねばならぬ」というアレグロの応答がある。

これなのだ。この世界には、かくあらねばならぬものが紛れもなく存在するのだ。それを相対主義的な見方で希薄化することを私は断じて許さない。「かくあらねばならぬか？」という疑問すらも持ってはらないものがこの世界には存在しているのだ。かくあらねばならぬものは、かくあらねばならぬのだ。

今から四ヶ月前、私はザルツブルグのザルツァハ川にほど近いホテルに滞在していた。ザルツブルグを出発する日の朝、私は駅に向かう道中、ある信号機に捕まり、横断歩道の前で立ち止まった。信号機が青に変わり、足を一歩前に進めた瞬間、「かくあらねばならぬ」ものがこの世界に間違いなく存在していることを強烈に知った。それは何かが一瞬にしてはち切れ、何かが一瞬にして結びつくような感覚であった。

それ以降、私の内側は、この世界に存在する「かくあらねばならぬ」ものを死守していこうという気概で満ち溢れるようになった。それは、今この瞬間に自分の目に飛び込んでくる自然の充満さよりも満ち溢れており、目には見えない空気よりも満ち溢れている。だからそれは、「かくあらねばならぬ」ものだと言えるのだ。2017/7/16（日）

## 1311. 小雨降る日曜日の午後

午前中、複雑性科学の概念を教育研究に適用した論文を四本ほど読んだ。先日にも、複雑性科学と教育に関する専門書を数冊ほどアマゾンで注文していたため、今月と来月は随分とこのテーマについて自分の理解を深めていくことになるだろう。

論文を読み終えたところで、森有正著『デカルトとパスカル』の第一部である、デカルトの哲学思想に関する部分をようやく先ほど読み終えることができた。森先生の仕事を通じて、随分とデカルトの存在が近くなったように思う。特に、デカルトの探究姿勢と思索の方法論的な進め方には非常に感銘を受けることが多かった。ただし、デカルトの神秘主義思想に関して、とりわけ神の捉え方については、また今後慎重に該当箇所を読み進める必要があるだろう。

私は、人間性の中に神性を見出すというギリシャ哲学の神秘主義思想に近い考えを持っているため、それとは異った考え方を持っているデカルトの神秘主義思想に対する理解がそれほど進まなかった。本書のパスカルに関する第二部は、明日か明後日から読み進めたいと思う。

今週は断続的な雨が降る日が多かった。今日の早朝は晴れていたのだが、昼食後から小雨が降り始めた。外の世界を吹き抜けていく風とは異なり、今週の天気は、開放できない何かを内側に抱えながら過ごすことを私に要求しているかのようであった。この四日間、自宅から外に出ることはなかったので、昼食後に一階に降りて郵便を確認したところ、三冊ほど書籍が届いていた。

一つは“Complexity Theory and the Politics of Education (2010)”であり、もう一つは“Complexity & Postmodernism (1998)”であり、最後の一冊はモーツァルトのピアノソナタ全曲の楽譜である。前者の二つは、この夏の探究課題と合致するものであり、数日以内に読み始めることになるだろう。また、モーツァルトの楽譜に関しては、早速中身を確認したところ、ベートーヴェンのピアノソナタよりも型を取得するにはふさわしいように思えた。今夜の作曲実践からこの楽譜を用いたい。

夕方の仕事に取り掛かる前に、昼食時に浮かんでいた考えについて書き留めておきたい。昼食を食べながら、この一年間論文アドバイザーを務めてくださったサスキア・クネン教授との協働論文執筆についてあれこれと考えを巡らせていた。昨年に取り掛かっていた修士論文をもとに、クネン教授とそれを査読付き論文としてどこかのジャーナルに投稿しようと思っている。その論文のみならず、もう一つ短めの査読付き論文を執筆したいと考えている。

そのアイデアについて、先ほどの昼食時に少しばかり考えていた。具体的に今執筆したいと思うのは、発達研究にコンピューター・シミレーションを活用する意義とその方法に関するものだ。このテーマは、ちょうど先日、クネン教授がJournal of Adolescenceに投稿していた論文のものと同じであり、私はその論文に記載されていない観点と自分なりの問題意識を持って、クネン教授にセカンドオーサーになってもらいながら短めの論文を執筆したいと思う。

第二弾の書籍が出版されたことによって、再び私は学術研究の方に集中できる環境が整いつつある。また、あの書籍を出版した時と同じような執筆欲求というものが学術論文の執筆に対して湧いており、これから少しずつそれを形にしていこうと思う。書籍でも論文でも同じだが、書こうと思っているだけではいつまでたっても何も書くことはできない。有無を言わせぬ形で書き始めるのが賢明な行動方針だ。

© YOHEI KATO 2018

私が日々の日記を遥かに凌ぐ投入量と文章量を持って、学術論文の執筆に本格的に従事し始めるのは、今から数年後の時期に設定しているが、そうした熱情期に入る前から、少しずつ査読付き論文を経験豊富な研究者と協働執筆していくことが大事になる。

現在構想中の論文は、発達研究において新たな発見事項を得るためのアプローチとして、データから発見事項や理論を導くという一般的なものではなく、研究者自身が構築した概念モデルや理論モデルにコンピューター・シミレーションを活用することによって新たな発見事項を見出していくアプローチ、さらには、既存の仮説的理論を検証するためにコンピューター・シミレーションを活用し、そこから新たな発見事項を導いていくというアプローチに関するものを予定している。

投稿先ジャーナルは、Developemental Reviewを含め、クネン教授から教えてもらったいくつかの候補を考えている。水を飲むのと同じように、日々の日記を書くのと同じように、論文を書きに書く日の実現に向けて、この秋からの一年間は非常に大切な時期となるだろう。2017/7/16（日）

## 1312. 自分の中の夏

今朝は五時半過ぎに起床した。昨日は、オンラインゼミナールに向けての資料作りに午後から夜にかけての時間を充てており、そのおかげもあり第三回のクラスの説明資料のほとんどが完成した。今週末からゼミナールが開講することになるが、開講前までに、少なくとも第四回のクラスまでの説明資料を作成しておきたいと思う。これまではマイクロソフトのPPTを使って説明資料を作成していたが、Preziを活用するのは今回が初めてであるため、実際のクラスでの受講生の反応が今から楽しみである。

説明の中で組み込まれる変動性や動きの観点からすれば、学習者にとってはPreziの方が説明内容が頭に入りやすいのではないかと思う。そのあたりの理由については、Preziについて紹介した過去の日記に書き留めていた通りである。

今日は早朝から晴れ間が広がり、雲に覆われた昨日の空が想像できないぐらいに青空が広がっている。起床時には、朝日が寝室に差し込んできた。その黄色く輝く朝日に照らされながら今日は目覚めた。早朝の六時から書斎の机につき、今日の仕事を始めた。書斎の窓から、遠方の空に一羽のカモメが飛んでいるのが見えた。朝日に照らされたカモメの背中は美しく、勇ましく東の空に向かっ

て飛んでいく様子は頼もしく見えた。カモメが飛び去った後、私は少しばかり日本の夏について思いを馳せていた。

七月の第三週に入った今頃の日本の夏はどうであろうか？日本の夏固有の暑さも含め、日本の夏の雰囲気がとても懐かしい。日本の夏を象徴する諸々の風物が自分の内側に流れ込んでくるかのようである。日本にいなくても、日本の夏を私はよく知っている。なぜなら私は日本人であり、長らく日本に住んでいたからだ。

だが、私はオランダの夏を知らない。このことは私を少しばかり寂しくさせる。20度前後の気温が続く、オランダの夏を初めて体験するからだろうか、自分の中でオランダの夏を見出していかなければならないことを知る。オランダの夏といつ出会ったのかもわからない状況が続く中、今の気候を夏だとみなし、少しずつオランダの夏を知ろうとする試み。それを続けていたら、そうこうしているうちにオランダの夏も半分を過ぎてしまった。

オランダのこの夏は、自分の人生において一回限りのものである。どの夏もそうだ。そのような思いで夏と向き合ったことがあるだろうか。一つの季節がその瞬間に存在しているということが、自分の人生における一回限りの出来事だということに、私たちはどれほど自覚的だろうか？

一つの季節が持つ有限性と尊さに気づけない時、私たちは自分の内側の季節など見出しようがないだろう。仮に今この瞬間、自分を包む夏を感じ、一回限りのこの夏に祈りを捧げながら毎日を生きることができなければ、自分の中にある夏を見出すことなどできはしないだろう。私は、オランダの夏を真に掴み、自分の中の夏を見出したいのだ。2017/7/17（月）

## 1313. 一羽のカモメの教え：表現行為の動因から形へ

何かに近づきつつあるという感覚と何かとの距離が広がりつつあるという感覚が同居するような感覚。何かを積み上げては壊し、また何かを積み上げていく中で何かを生み出していく感覚。そうした感覚を日々抱いている。一羽のカモメが書斎の窓の近くを横切り、早朝の夏の空を優雅に飛んでいるのが目に入った。「なぜカモメはあのように空を飛ぶのか？」という問いが自発的に生まれた。この世界は、「なぜ」と問うてしまうと答えようのない現象や事柄で満ち溢れている。

世界の現象や出来事は、「なぜ」という問いに対して一つの論理で説明できるほど単純ではない。しかし私は、カモメがあのように空を飛んでいた理由について考えていた。だが、その理由を直接的に考えることは難しく、カモメが空を飛んでいた意図や目的が何なのかについて考えを巡らせていた。仮にあのカモメに主観性があったとしても、その主観性を私が完全に理解することなどできない。

だが、主観性を発揮しながら飛んでいたあのカモメを動かす主動因のようなものなら、何か見えてくることがあるのではないかという思いがあった。あのカモメを動かし、飛ぶ行為を促したものの正体を知りたかった。それは単純に、「飛ぼう」という意図が生じる前にカモメの内側に宿る、「駆り立てる何か」なのではないかと思った。飛ぶという動作を促す意図が発生するその前に、すでにその意図を促す何かがあるのだ。

その何かのことを今、「駆り立てるもの」という言葉を当てていた。それは意図する意図しないに関わらず、止むに止まれぬ形で生じるものだ。そして、カモメにとって飛ぶという動作は、一つの表現行為なのではないかという考えがよぎり、そうであれば、表現行為はこちらの意図を超えた働きによってなされることになる。何かを表現するというのはやはり、自分の意図が生じる前からそれを促す動因のようなものがあり、その動因によって駆り立てられる形でなされるものなのではないだろうか。

あのカモメが、書斎の窓の近くから赤レンガの家の屋根に向かって飛んで行ったのは、カモメの意図を超えた表現行為だったのだと知る。おそらく、意図を超えた動因が先にあり、それが飛ぼうという最終的な意図を生み出し、あのカモメは空に飛びったのだ。そして、飛行の最中には再び意図を超えた働きによって「飛ぶに任せて飛ぶ」という状態にあったのだ。赤レンガの家の屋根に降り立ったカモメは、その時に初めて、自分が飛んでいたことに気付くのだろう。そこから私は大きなことを学んだようだった。日々の仕事を、あのカモメが早朝の空を飛んだのと同じように進めていこうと思ったのだ。

読むことや書くことの意図を超えた形で日々の仕事に打ち込むこと。言い換えると、表現行為の一種である読むことや書くことを促す動因に自らを委ねる形で、意図を超えた意図に従いながら一つ一つの仕事に取り組むこと。その時、自らを駆り立てる動因を起点として、明確な意図を持ち、それ

© YOHEI KATO 2018

でいて行為の最中は明確な意図を手放すのだ。「読むに任せて読む」「書くに任せて書く」という運動が始まるのはそこからだ。

そして再び私は自らの意図を持つことによって、一連の行為を収束させ、それまでの運動を一つの形として認識する必要がある。表現行為の絶え間ない生成とそれを形にしていく試みには、そのようなプロセスが介在している気がしてならない。

ベートーヴェンの声楽曲がとても美しい。名の知れぬソプラノ歌手の素晴らしい声が書斎の中に鳴り響く。窓の空を見ると、カモメの姿はもうそこにはなかった。だが、私の内側には、表現行為に関する確かな考えがあった。2017/7/17（月）

## 1314. MOOCに関する二年目の研究案

今日は午後から、大学の学生支援課に行き、二年目のプログラムの学費を納めに行く。昨年は幸運にも、EUROが弱い時期に欧州での生活を始めることができ、日本円の強さも手伝って、学費や生活費を低く抑えることができた。一方、その時の状況と比べてみると、最近はEUROが強くなっている。実際に、昨年は1EUROが110円を切るときもあったのに対し、今は130円前後をうろついている。為替の変動によって数十万円ほど学費が高騰したような感じを受けるが、資産の大部分が日本円であるから、こればかりはどうしようも無い。午後に学費を納めたら、大学図書館に行き、読むべき論文を10本ほど印刷しようと思う。

今朝は、「マルチフラクタル」に関する論文を二本ほど読み進めていた。両者は共に、私が少し前から注目をしていた「マルチフラクタルトレンド除去変動解析（Multifractal Detrended Fluctation Analysis: MFDFA）」に関するものである。それらの論文を読みながら、九月から始まるフローニンゲン大学での二つ目の修士課程──欧米での三つ目の修士課程──において、修士論文の主題がより明確になった。当初より、今回の修士論文はMOOCを題材とし、MOOCのコンテンツと学習効果について何らかの研究を行おうと思っていた。

先々週あたりに、突然思いついた研究アイデアをノートに書き留めていたが、それよりも一歩進んだアイデアが先ほど思いついた。以前のアイデアは、MOOCの一つのコースを取り上げ、一つのコースを構成する隔週のレクチャーそれぞれに対して、カート・フィッシャーのスキル尺度を用いて複雑

性を定量化し、それによって生み出される時系列データのフラクタル構造と隔週のミニテストの成績と最終課題の成績を比較するというものであった。先ほど思いついたものに関しても、時系列データを生成し、それに対してフラクタル解析を行うことは同じなのだが、フィッシャーのスキル尺度を用いて定量化するよりも、レクチャーの一つ一つのセンテンスの語数をもとに時系列データを作成し、それに対してフラクタル解析を行おうと思った。

その理由として一つには、フィッシャーのスキル尺度を全てのレクチャーに対して行うのはあまりに時間がかかるということである。別の理由としては、フィッシャーの尺度に習熟している人が周りにはほとんどいないため、データに関する測定者間信頼性を確保することが難しいということもある。

数週間前の私であれば、センテンスの語数を数え、それを時系列データとすることに抵抗感を示していたであろう。というのも、これまで構造発達心理学の研究に従事していた私は、常にセンテンスの構造とその構造が持つ複雑性度合いを分析することに従事しており、センテンスの語数を数えるというあまりに単純な方法では、複数のセンテンスから構成されるコンテンツの構造や複雑性を分析することなどできないだろうと思っていたからだ。

しかし、この考え方は誤りであることに気づいた。非線形ダイナミクスの理論と手法を学ぶにつれて、センテンスの語数からでも、コンテンツの構造や複雑性を分析することが十分に可能だということがわかったのだ。これは私にとって、大きな認識転換だった。一つ一つのセンテンスは、特定の語数を持っており、それを一つのデータとする。すると、毎週のレクチャーに対して、100近いほどのデータポイントからなる一つの時系列データを生み出すことが可能になる。

今回の研究で取り上げる予定のコースは七週間にわたるものであるから、合計で700ほどのデータポイントを得ることができる。隔週ごとの時系列データに対してフラクタル解析を適用し、そのフラクタル次元を特定する。そのフラクタル次元と、隔週ごとの確認テストの結果を比較する。さらに、コース全体に及ぶ時系列データのフラクタル次元を特定し、それと最終課題の成績を比較し、どのような関係が見出せるのかを調査してみたいと思う。

先ほどの論文は、世界の著名な文学作品に対してフラクタル解析を行い、その結果、多くの作品が、人が心地よいと思う音が持つフラクタル次元と同じような次元のフラクタル構造を持っていることが

わかった。つまり、世の中で傑作とされる文学作品は、人に心地よさを与えるような構造的リズムを持っていたのである。ここから、文学作品は優れた音楽作品と同様に、意図的に構築することが可能だと思わされた。

そこからさらに、MOOCにおいても、教育効果のあるコンテンツを意図的に構築していくことが可能だと思ったのだ。優れたレクチャーには、学習効果を高めるような構造的リズムが隠されているのではないかという仮説のもと、今回の研究を通じて、一つのコースを構成する各レクチャーのフラクタル次元を明らかにし、それと実際の学習成果を比較することを行いたい。まだ二年目のプログラムは始まっていないのだが、すでにデータを収集し、分析に資するようにデータの加工を始めている自分がいる。これは自発的な研究熱による作用である。2017/7/17（月）

## 1315. この時の流れのように

初夏の優しい太陽光と吹き抜ける清々しい風。今日は快晴に恵まれ、しかも初夏にふさわしい気候だった。昼食を済ませた私は、大学の学生支援課に足を運び、二年目のプログラムの学費を納めた。二年目のプログラムは、気づけば欧米で取得する三つ目の修士号となる。自ら時間をかけて研究するべき大きな主題が具体的に明確になったため、数年以内に欧米のどこかの大学院の博士課程に進むことになるだろう。

自宅を出発する時の私の心は晴れ渡っていた。久しぶりに半袖で外に外出することができるぐらいに、今日は暖かい気温だった。フローニンゲンの街の中心部にある学生支援課に向かう道中、私は晴れ渡る青い空をしきりに仰ぎ見ていた。夏季休暇に入ってから、私の生活リズムは、晴れの日にランニングに出かけることがなければ、四日置きに外に食料の買い足しに出かけるだけである。そのため、ここ四日間は一階の郵便受けに書籍を取りに行く以外は、文字どおり一歩も部屋の外に出なかった。

そうしたこともあってか、大学のメインキャンパスに向かう私の気持ちは高揚しており、この世界を初めて眺めるような眼差しで道ゆく景色を眺めていた。外出中、何気なく世界を見渡しながら歩いていても、必ず一つや二つは新たな発見がある。それを考えてみると、この世界はやはり未知なもの

で溢れていることがわかる。誰かが工事をしてくれた、舗装された石畳の歩道の上を一歩一歩進むたびに、今日というこの瞬間にこの場所に存在していることに対して、たまらなく感激した。

学生の大部分は夏季休暇に入っており、大学のメインキャンパスにはほとんど人はいなかった。500年を越す歴史を持つこの大学のメインキャンパスに到着すると、重厚な雰囲気に自分が包まれていることに気づいた。普段以上に何かが高くそびえ立っているような気がしたのである。荘厳なメインキャンパスの入り口の重たい扉を開け、私は学生支援課に向かった。

ほどなく学費を収めることができ、二年目のプログラムの開始が今からとても楽しみだ。仮に自らの熱情によって自己を完全に溶かすことができるのなら、そうしたい。一年目以上に熱情的な探究の中にあって、それでいて自己の存在が立脚するたった一つの静寂点の上に立ち続けたいと思う。もう、私は自分が見ようと思っているものが見えるまで、他のものは一切見ない。

そのような思いを胸に、私はキャンパスを後にした。その足で次に向かったのは、社会科学キャンパスにあるコンピュタールームだった。そこで私は、同年代の探究者の中で最も敬意を持っているザカリー・スタインの論文を11本ほど印刷しようと思っていた。社会科学キャンパスの裏手から学内に入ると、そこには深閑とした林が広がっている。

私はこの中を通ることが非常に好きで、そこはこの季節でも若干肌寒いぐらいだが、薄暗い林が醸し出す独特の雰囲気と香りが好きなのだ。林に一歩足を踏み出すと、私は突然めまいに襲われた。それは小さなめまいであり、身体的な現象ではなく、存在的な現象だった。林に一歩を踏み出した瞬間、衝撃的な事実を知ることになった。

地面に転がっている一つ一つの石や砂粒の多様さ、辺りに咲いている雑草や花々、そして林の木の下に生えているキノコを見た瞬間、この世界がこれほどまでに多様な存在で満ち溢れていることに対して私はめまいを覚えたのである。同時に、このような世界を生み出した創造者なる存在に思いを馳せていた。林の途中に置かれている材木でできたテーブルや、遠目に見えるキャンパスとその横にあるブルドーザーなど、人工物も含めて、この世界が多種多様な創造物で溢れていることに対して私は畏怖心を持ったのである。

それは私の足をすくませるほどの思いであり、こんな世界に自分は生きているのだということに、言語を絶する神妙な気持ちになった。一つの創造主から多数の存在が生まれ、多数の存在の中から一つの創造主に向かうものが現れることにも不思議な思いがした。

目的の論文を全て印刷し、私は自宅に向かった。ノーダープラントソン公園を横切ろうとしていた時、アヒルの群れが池の近くに集まっていた。その中で顔を体に丸めながら眠っているアヒルを見つけ、近寄ってその様子をつぶさに観察しようと思った。観察をしようという意図が伝わってしまったのか、私が近づくと、そのアヒルは顔をパッと上げ、私の方をじっと見た。眠りを妨げしまったことを少し申し訳なく思い、私はそのアヒルを観察することなくその場を後にすることにした。

自宅近くの運河をかける橋に近づくと、ちょうど運河を通る船のために橋が上に上がっていた。オランダ国旗をぶら下げた大きめの船がゆっくりと通り過ぎていく姿を、平和な気持ちで私は眺めていた。その船には三人家族が乗船しており、すでに成人期を過ぎているように思える長男らしき男性が、船の先端でリンゴをかじりながら船の進行を見つめていた。その一艘の船が通り過ぎると、続けざまに、スウェーデン国旗をぶら下げた船、ドイツ国旗をぶら下げた船、最後には再びオランダ国旗をぶら下げた船がゆっくりと私の目の前を通過していった。

橋が上がっている間、通行人は特に焦るような表情も見せず、静かに船の進行を眺めているようだった。そこで私はふと、この国の時間の流れ方を改めて好ましく思った。ゆったりとした時の経過の中で日々の生活を営むというこのあり方。私はこの一年間、フローニンゲンに流れるゆったりとしたこの時の流れにどれだけ支え続けられたことかを改めて知る。この時の流れのように、私はこれからの人生を緩やかに着実と形づくっていきたいと思う。2017/7/17（月）

## 1316. 最後の砦の前で

世界が透き通って見えるような朝だった。早朝目覚めてみると、身体に澄み渡る感覚が走り、その感覚によって、取り巻く世界が輝く透明性を持っているように知覚された。昨夜の就寝前、ベッドの上に横たわっていると、瞑想的な静けさの中で私は自分自身を見つめていた。時折小鳥のさえずりが小さく聞こえた。その鳴き声さえも無音の空間世界に溶け込んでいってしまうような環境。こうした瞑想的な静けさは、私が最も大切にしているものだ。

これからの人生において、このような空間世界が周りにあるか否かが、生活拠点を決定する指針となるだろう。一切のものが溶け込んでしまうような世界の中で、私はこれからについて少しばかり沈思黙考していた。やはり私は当分日本に戻るつもりはなく、また戻れないのだとわかった。戻るというのは生活拠点を置くという意味であり、当分というのは数年か数十年なのか、これについては定かではない。ただし、自分が日本に戻ってはならない理由だけは明確だ。

欧州での生活を始めてからも、人生を閉じる前の10年間は日本で過ごしたいと思っていた。しかし、昨夜の私の考えはもはやそのようなものではなかった。日本か国外かという地理的な問題ではなく、自らの霊性が涵養され、活かされる場所がそこにあるかどうかが重要だった。

これはひどく自己中心的な見方かもしれないが、残念ながら母国は自分の霊性を緩やかに育んでくれることはあったとしても、それを真に発揮できるような場所ではない。皮肉なことだが、自らの霊性を発揮しながら母国に関与するためには、母国の外にいなければならないことを痛感させられる。 結局今の私は、母国に関わりたいのだと思う。そうであるがゆえに、母国に戻ることを決意するというのは、自らの霊性をかけて母国に関与することを放棄した時なのだということを改めて理解した。だから母国に戻れない。だから母国に戻る気がない。それが今の自分の正直な思いだ。

晴れ渡る早朝の空に、数羽の鳥が自由に飛び回っている。遠くから見ればそれは小さな蝶であり、近くから見ればそれは立派な鳥である。それらの鳥たちは、透明な世界の中で自由に飛び回り、そして透明な世界のどこかに消え去った。

昨夜の瞑想的な静けさの中、最後に取り上げていたのは母国語の使用に関する問題である。毎日毎日、私が母国語で日記を書き留める行為は、自分の中で死守せねばならない最後の砦の前に立つことを意味しているようだった。自らの言語を司る魂を英語に売ることができたら、どれほど楽なことだろうかといつも思う。だが、それは絶対にしてはならないことなのだ。

自らの探究をより深く推し進めてくれるのは、間違いなく英語である。実際、自分の仕事としての研究活動は、全て英語空間の中で行われる。それを考えた時、母国語を放棄して英語の世界に全てを投入することがいつも魅力的に映る。だがそれに魅了されるのではなく、私はそれに抗いたいと

思うのだ。それを実現する唯一の手段が日記だった。昨夜の瞑想的な静けさの中で浮かんでいた心象風景は、断崖絶壁に立ちながら日本語で日記を書いている自分の姿だった。

死の直前まで日本語で日記を書いている自分の姿だった。最後の最後まで、母国語で日記を書き続けることを切に願っていた。それは、生涯を閉じる前の唯一の願いであるかのように思えた。2017/7/18(火)

## 1317. 冬の終わり

観想的な生活。黙想に終わり、黙想で始まる日々。欧州での私の日々と生活はそれらの言葉に要約される。そして、それらの言葉に要約されえぬものがあるのもまた確かだ。

昨夜、仕事に取り組んでいる時に、「ある」と「ない」という言葉を巡る存在規定の問題に直面していた。ある対象を説明する時に、どのようにすればそれが完全にあると言えるのか、逆に完全にないと言えるのか、そのようなことを考えていた。これは単なる言葉遊びではなく、自分にとってはとても重要な問題であった。

「ある」ということを際限なく積み上げていったとしても、それが完全にあるとは言えない場合があるということ。一方、「ない」ということを際限なく積み上げていったとしても、それが完全にないとは言えない場合があることに突き当たっていた。また、「AはBではない」という否定を積み上げていけば、Aの存在が肯定的に浮かび上がるのだろうか。これも際限なく続くように思われた。そのようなことをぼんやりと考えていたのが、昨夜の出来事だ。

今朝、起床してみると、冬の終わりから症状が出始めた手荒れがようやく回復に向かっていることがわかった。食器を洗う洗剤を水で薄め、荒れた右手を極力使わないようにしたり、ハンドクリームなどを絶えず塗っていたが、それほどの効果をもたらさない日が長く続いた。夏も中盤に差し掛かった今頃になって、ようやく冬の手荒れが治るという事態がとてもおかしく思え、自然と笑みがこぼれる。手荒れが完治に向かう今日を持ってして、冬の終わりとした方がいいのかもしれない。そのようなことをふと思った。

今日は午前中から論文を読み込んでいく。読むべき論文の数など決めない。読みたいと思う論文群を、読みたくないと思う瞬間まで読み進めていく。午後からは、オンラインゼミナールの第四回目のクラスの講義資料の大枠を作成したい。資料作りという創作行為は、私にとってある意味危険な側面を持っており、一度取り掛かると没入状態を引き起こしかねない。

仮に午後から取り掛かるとしても、夕食までの時間という区切りをつけたいと思う。今日はとにかく論文を読みたい。読みに読み、書きに書くという活動が終われば、黙想的な形で再び今日という日を終えることになるだろう。そしてまた、黙想的な形で明日が始まるのだ。2017/7/18（火）

## 1318. 風土と自己

今朝は五時半過ぎに起床し、六時から仕事を開始した。午前十時を迎える段階で、すでに七本ほどの論文に目を通すことができ、今日は論文の読み込み作業が非常にはかどっている。ここで一息つくために、コーヒーを飲みながら少しばかり文章を書き留めておきたいと思う。

昨日から、100時間弱に及ぶベートーヴェン全集を聴き始めた。これまで私はベートーヴェンの作品において、ピアノソナタ、ピアノ協奏曲、そして交響曲ぐらいしか聴いたことがなかった。しかし、この全集に出会うことによって、ベートーヴェンが残した声楽曲に触れることができたことを有り難く思う。100時間弱にわたるベートーヴェンの一曲一曲を聴きながら、改めてベートーヴェンが積み上げていった仕事の重みを感じざるをえなかった。

一人の人間が、毎日自分のなすべき仕事に取り組み続け、日々小さな創造行為を続けていくとき、それは一つの巨大な創造物に結晶化されていく。午前中の私の行為が、そうした創造物に近づく一歩であることを願う。

昨日、フローニンゲンの街の中心部に位置する大学のメインキャンパスに向かって歩いている最中、文化的多様性に触れながら自己形成を図ってきた過去と現在の自分について少しばかり考えていた。振り返れば、日本で生まれてからも、日本の様々な地域で生活をしていたように思う。また、日本を離れてからは、米国の様々な地域で生活をし、現在は欧州で生活を送っている。こうした文化的多様性に触れざるをえない生活を通して、随分と自分の思考や感覚、そして言葉が変容していったように思う。

どうやら、風土に根ざした思考や感覚、そして言葉のようなものがあるようなのだ。今の私は、オランダという風土に根ざした思考や感覚を持ってこの世界を生き、そして言葉を紡ぎ出している。私の今この瞬間の思考・感覚・言葉は、日本の風土では生まれえないものであることに気づく。また、それらは他の国においても生まれえず、この場所でしか生まれないものなのだということに気づかされる。

そのように考えると、私は多様な文化圏で生活することを通じて、様々な風土の上で自らの思考・感覚・言葉を育んでいったのだということを知る。そして、今この瞬間の自己はオランダの風土と切っても切り離せないものであるがゆえに、風土愛のようなものが芽生えつつあることに気づいている。そのようなことを考えながら、昨日私は大学のキャンパスに向かって歩いていた。この風土の上に成り立つ自己は、今この瞬間のものであり、それが今後の自己を形成する基礎となる。

オランダのこの地でしか生まれえない思考と感覚をつぶさに捉え、この地の風土に立脚した言葉を絶えず書き留めておきたいという気持ちを改めて持った。今の自分の言葉は、この土地でしか育まれないのだから。2017/7/18(火)

## 1319. この夏の北欧旅行の旅程:デンマークとノルウェーへの旅へ向けて

昨夜、ようやくこの夏のデンマーク・ノルウェー旅行に向けての各種の予約を済ませた。一夜明けた今朝は、旅の始まりを今から心待ちにしている自分がいることに気づく。

昨日の夕方から各種の予約をしようと思っていたのだが、実際には夕食後からとなり、結果としていつもの就寝時間を超える形でインターネットの画面とにらめっこしながら各種の予約を進めることになった。この旅を通じて、自分の内側でどのような思考や感覚が湧き上がるのかは、旅を始めてみなければわからない。ただし、間違い無く言えるのは、今回の旅も私の内側を刺激し、そして私自身を育む機会になるだろう、ということだ。旅行計画に漏れがないかを確認する意味でも、今回の旅の外形を書き留めておきたい。

8/8:フローニンゲンからコペンハーゲンへ

当日は、早朝の七時前に自宅を出発し、フローニンゲン中央駅に向かう。FlixBusという高速バスを利用し、7:15の便に乗り、10:00にブレーメン中央駅に到着する。当初は、ドイツ北西部の町リアーまでバスで行き、そこから電車を活用しようと思っていたが、昨日改めて道筋を確認すると、出発の時刻の兼ね合いから、バスでブレーメンまで行く方が得策のようだった。

FlixBusを活用するのは今回が初めてであり、このバスを運行している会社について調べてみると、会社名もFlixBusであることがわかり、どうやら2013年に設立された新しいバス会社のようだ。ホームページの印象や実際に走っているバスのデザインなどを見たとき、とても斬新な感じがしており、この会社が近年設立されたものであることに少しばかり納得がいった。

FlixBusはドイツの会社であり、ヨーロッパ中にバスを運行するネットワークを持っている。「ネットワーク」というのは、今の私にとって、知性の発達研究をする上でのキーワードであるため、FlixBusのバス運行のネットワークについても調べてみた。ネットワーク図を見ると、確かに西ヨーロッパにおいて密なネットワークを持っており、中央ヨーロッパのいくつかの都市にハブとなる拠点を持っているようだった。ただし、東ヨーロッパに関しては、運行ネットワークが伸びておらず、それはこれからなのかもしれない。

ブレーメン中央駅からはハンブルグまで電車に乗る。時間として一時間ほどでハンブルグに到着し、そこからコペンハーゲン中央駅まで五時間ほどの電車の旅となる。ブレーメンからハンブルグまでは「インターシティ」と呼ばれる特急列車に乗り、ハンブルグからコペンハーゲンまでは「ユーロシティ」と呼ばれる特急列車に乗る。コペンハーゲンには午後四時過ぎに到着するため、その日は市内を散歩でもしようと思う。

8/9：ニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館へ

実は今回の旅の目的は、ノルウェー北西部の町ベルゲンで静かな時間を過ごすことにあるため、途中のコペンハーゲンとオスロは旅のメインではない。だが、せっかく足を運ぶため、自分が最も関心を引く場所を厳選し、そこだけを訪れるようにしたいという思いがある。

コペンハーゲンでの二日目は、開館に合わせてニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館に行き、一日中この美術館で過ごす予定だ。コペンハーゲン国立美術館に行くのかこちらの美術館に行く

のか迷ったが、ニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館には、古代エジプトや古代ギリシアのコレクションもあることが決め手となった。また、この美術館に所蔵されているオーギュスト・ロダンの『考える人』の彫刻に何かがありそうな気がしたという直感と、美術館の中庭がとても美しい印象を放っていたので、この美術館でゆったりとした時を過ごすことにした。この日はその他にどこにも行くことはないだろう。

8/10：コペンハーゲンからオスロへ

この日はコペンハーゲンを離れ、オスロへ向かう。私にとって、この移動がなぜか今から楽しみだ。昨夜その経路を調べていると、地理に関する自分の無知さが逆に喜びをもたらす瞬間があった。私はてっきり、コペンハーゲンからオスロへ向かうまでの移動は、全てノルウェー国内を通るものだと思っていたのだが、実際は違った。

オスロに向かうまでの道の大部分は、スウェーデン国内を通ることになっていたのだ。コペンハーゲン中央駅で午前八時過ぎの列車に乗り、九時過ぎにスウェーデン南西部の街ルンドに到着する。調べてみると、このルンド中央駅というのは、スウェーデン国内でも最も利用客の多い駅の一つとのことである。調べる前は、ルンド中央駅はノルウェーの片田舎の小さな駅だと思っていたのだが、そもそもそれはノルウェーにあるのではなくスウェーデンにあり、しかも規模の大きい駅だということに気づかされるという嬉しい驚きがあった。

ここからが私が最も楽しみにしている経路である。ルンド中央駅からは、再びFlixBusの高速バスを活用する。九時半のバスに乗車し、そこから七時間弱のバスの旅となる。最初はトイレの問題など懸念材料があったが、よくよく調べてみると、FlixBusの高速バスは綺麗なトイレを完備していることがわかり、何も心配なくオスロまでバスで移動できることがわかった。このバスは、スウェーデン西部の海岸沿いを走りながらオスロに向かうであろうから、途中の景色が今から楽しみでしょうがない。オスロには夕方到着する予定であり、その日はオスロ市内を散策しようと思う。

8/11：ムンク美術館とオスロ国立美術館へ

オスロ滞在の二日目は、ムンク美術館とオスロ国立美術館に足を運びたいと思う。二つの開館時間を調べたところ、まずはムンク美術館に行く方が得策だと思った。今回の訪問は、エドヴァルド・ムン

クが残した作品や彼の生涯を詳しく知る素晴らしい機会になるだろう。ムンクの作品群は、どこか陰鬱な印象を私にもたらすが、その陰鬱さに惹かれる自分がいるのは確かだ。

ここでもムンクという人間に対して、そして自分に対して様々な気づきが得られるのではないかと思っている。この美術館には、ムンクの作品の大部分が所蔵されているそうであり、絵画のみならず版画などを含めると、その数は膨大なものになることがわかった。ムンクもきっと止むに止まれぬものを内に抱えながら、それを絶えず表現することを宿命づけられた人間だったのだろう。開館から昼過ぎまでこの美術館に滞在したいと思う。

その後、オスロ国立美術館に足を運ぶ。調べてみると、ムンクの『叫び』のうちの一枚がこの美術館に所蔵されているようだ。ムンクのみならず、ゴッホ、モネ、モディリアーニ、ドガ、ルノワール、ピカソ、ロダンなどの近世ヨーロッパの作品も所蔵している。この美術館は、ノルウェーで最大のものらしく、全ての作品をじっくり見て回ると膨大な時間がかかりそうだ。ムンク美術館にどれだけ滞在するのかの兼ね合いを見ながら、オスロ国立美術館での過ごし方を考えたい。

8/12:オスロからベルゲンへ

コペンハーゲンからオスロへの移動に負けず劣らず楽しみにしているのが、オスロからベルゲンへの移動である。おそらく、この移動が最も心躍るものになるのではないかと思う。オスロからベルゲンまでは、直通列車が運行しており、六時間半ほどの列車の旅となる。この列車の旅の途中で、ノルウェーの深い森やフィヨルドと出会うことになるだろう。それらが今から待ち遠しくてしょうがない。ベルゲンには午後三時前に到着し、その日はベルゲンの市内散策をする。

8/13:コーデー・ベルゲン美術館へ

私はてっきり、ベルゲンという町は単なる港町かと思っていたため、コーデー・ベルゲン美術館のような立派な美術館があることに驚いた。ベルゲンでの二日目は、一日中この美術館で過ごす予定である。この美術館は、「コーデー」と呼ばれる四つの建物と三人の作曲家――エドヴァルド・グリーグ、ハラール・セーヴェルー、オーレ・ブル――の博物館を合わせて、全七館から構成される。一日で七館全てを回れるか定かではないが、見るべきものが何なのかを事前によく調べ、そこだけは必ず足を運びたい。

8/14：エドヴァルド・グリーグ博物館

私は、ノルウェーが生んだこの作曲家についてこれまで知らなかった。ベルゲン生まれのグリーグは、音楽家としての教育を受けるため、ライプツィヒ音楽院に留学をし、晩年は再びベルゲンに戻り、自らが生まれたこの町で生涯を閉じた。

グリーグは、数多くのピアノ作品を作曲しており、「北欧のショパン」と呼ばれていることを初めて知った。この博物館は、ベルゲンの町の中心部にあるのではなく、ベルゲンから郊外へ電車で数十分ほど行ったところにあるトロールハウゲンという場所にこの博物館が建っている。「トロールハウゲン」という地名は、「妖精トロールの住む丘」という意味らしく、なんとも幻想的だ。この場所でグリーグは、64歳で亡くなるまで22年間を夫人とともに過ごしたそうだ。

ベルゲンでの三日目は、グリーグ博物館でゆったりとした時間を過ごすことにしたい。

8/15：ベルゲンからフローニンゲンへ

今回の旅は結局、一週間ほどのものにすることにした。今の私がなすべき仕事を考えた際に、それ以上長く旅行をするべきではないと判断したためである。

帰路はさすがに飛行機を活用することにした。ベルゲン空港からコペンハーゲン空港に行き、そこからフローニンゲン空港に行くという経路だ。コペンハーゲン空港で三時間ほど滞在することになるが、フライト時間はそれぞれ一時間程度なので、移動の疲れもそれほどないだろう。

ざっと今回の北欧旅行の外形を中心に書き留めてみた。この旅の内形は、実際に旅を始めることによって徐々に満たしていきたいと思う。旅程を書き留めたことによって、改めて移動手段やホテルの予約に抜け漏れがないことを確認することができた。あとは旅の始まりを待つだけである。2017/7/19（水）

## 1320. ここでしか育まれえぬ思考と感覚

早朝、この夏の北欧旅行の旅程について書き留めた。文章を書き終える頃には、辺りもすっかり活動的な午前中の様相を呈し始めた。

先ほどは、北欧旅行の外形についてしか触れないようにしていたのだが、それでも自然と今回の旅の各地でもたらされるであろう思考や感覚などが自発的に湧き上がってくるかのようだった。それらは外側に姿をあらわすことを我慢できないようなエネルギーを持っており、非常に密度の濃い感覚質でもあった。

仮にこの夏、エジプトとギリシャに行っていたら、旅で得られる新たな感覚質に押しつぶされ、内側の感覚がはち切れていただろう。今回の北欧旅行は、それぐらいの充実さを今から予感させてくれる。それはまるで一つの物語に魅せられているかのようである。物語の細部は未だ謎に包まれているのだが、物語の全体構造が一つの感動を呼ぶのである。そのような感動の中に浸っているのが、先ほどの自分であった。

ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲が高らかに書斎に鳴り響いている。書斎の窓の外に広がる世界を流れている風と呼応するかのごとく、ヴァイオリン協奏曲が颯爽と奏でられている。初夏の爽やかな風とヴァイオリンの足が一体となって進行する感覚は、実に清々しい感情をもたらす。100時間弱に及ぶベートーヴェン全集もようやく三分の一に到達したようだ。

先ほど、今回の北欧旅行で訪れるノルウェー西部の町ベルゲンにゆかりのある三人の作曲家について少し調べていた。エドヴァルド・グリーグ、ハラール・セーヴェルー、オーレ・ブルの三名の生涯について調べ、彼らの楽曲を早速ダウンロードした。彼らの曲を真剣に聞けば、それがノルウェーの風土から育まれたものであり、とりわけベルゲンという土地の恵みに大きな影響を受けていることがわかるのではないか、という考えが浮かんだ。一人の表現者は、自らが生まれた場所や生活をした場所の風土に育まれる形で創造物を生み出していく。

この点についてはまさに、数日前の日記に書き留めていたことだ。そこでしか育まれないもの。そのようなものがきっとあるに違いない。欧州での生活を始めて以降、この考えは強まる一方であり、そ

れは思考を超えて、強い内側の感覚として捉えられるものになっている。ノルウェーに滞在中、私はこれら三人の作曲家が残した作品を繰り返し聴くことになるだろう。

ノルウェーの森やフィヨルドに取り囲まれた自然環境の中で、それら三人の作曲家が残した作品を聴いている自分を自然と想像していた。その想像を通じて私は、自分が欧米に留まり続けようとする理由について再度考えていた。

自らの関心領域を考えると、確かに欧米でしか探究できないものがあるということが大きいが、それ以上に、ここでしか発揮され得ない思考と感覚を持って探究に打ち込むことが重要な理由なのだと理解した。今私が生活をしている風土で育まれたものを通じて、これまでの自分の思考と感覚を新たな形として育んでいくことが何より重要だ。

私にとって、既存の思考と感覚を掴み直し、それらを新たな形に変容させながら熟成させていくためには、これまでとは異なる風土に身を置くことが大切だった。ここでしか考えられないものやここでしか感じられないものと向き合いながら、欧州での私の日々はこれからも積み重ねられていく。2017/7/19（水）